
よくあるよくある・・・ねえよ！

如月暦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よくあるよくある・・・ねえよ！

【Nコード】

N2626Y

【作者名】

如月暦

【あらすじ】

世界に正義なんかない———そんなことをあなたは思ったことはありますか？そんなこと言ったら———貴方はただではすみません。そう。神様に殺された彼に オ コ ラ レ マ ス ヨ・・・？

ブログ

やあこんにちわ。

みんなは転生したことはあるかい？

…まあ仮にあったとして、そんなこといったら「頭おかしいんじゃない？」
ね〜こいつう〜ww」

とか何とか言われるだろうな。 あったとしたらそれは神様のミスとか何とかなんだろうな…

俺は違う。

何とも迷惑こうむる理由だ。

なんだと思う？

暇つぶしだよ。

これはそんな俺のよくある日常を描いた、アブノーマル異常な物語である。

名前：三ヶ木菟一計みかぼいつけい

（男）

設定：元の世界に幼いころの虐待で、ゆがみ歪んだ心になってしま
うが、心療内科のある女性に心のカヴァーをしてもらい、仮の姿に
戻った。基本冷静。天才。努力家。タガがはずれると変態。

能力：アブノーマル異常でも、マイナス過負荷でもない、常に絶対的な正義でいなくては
ならない存在。プラス必要悪である、ただ一人の存在。

プラス必要悪とはマイナスから自力で幸せになった者にだけでてくる。そ
れ故めだかの完成ジ・エンドでも完成させることもおろか、使うことすら出来
ない。つまりはチート。

プラス必要悪一覧：異常・過負荷封じ《キリング》…あいての、異常・過
負荷を封じる。異常に対しては30分過負荷を封じることがで
きる。しかし能力を多数持つる者には1回までしかできない。過
負荷に対しては、1年に3回まで過負荷を完全にコントロールさせ
ることができる。

常識破り《バトルルール》…身体能力を数百倍にもすることができ、

回復能力も数千倍にすることができる。自らの血をけがをした人間に飲ませれば、けがを一瞬にして直すことができる。

オールフイクション
超理想主義：球磨川の大嘘憑き《オールフイクション》の逆。つまり、全てを[あつたこと](#)にする過負荷。[最初からあつた過負荷](#)。修行してオン、オフができるようになった。しかし、球磨川の大嘘憑き《オールフイクション》で、無かったことにしたものをあつたことにはできない。

そこは（前書き）

どうもはじめましての方は初めまして。ネギま！の小説のほうを読んでもくださっている方はお久しぶりです！ 1か月ぶりですね。

上で書いたとおり、ネギまで2次創作を書かせてもらっているのですが、それを一時やめさせていただきこちらを書かせてもらいました。

未熟者ですがどうぞよろしく願います

そこは

「いつからここにいたんだっけ？」

彼は頭をかきながらそういった。

「物心ついたときにはもうここにいたと思う」

僕はそう答えた。――否。そう答えることしかできなかった。

「そうやっていつまで現実逃避を続けるつもりだい？」

かれは呆れた顔でそういった。

元はといえばお前のせいだろうに。

「うるさい。しょうがないだろ？暇だったんだから」

「君のぶっ壊れた心をカヴァーしたあの人に出会わせてあげたのは僕なんだぜ？もうチョイ感謝しろよ」

「誰がお前なんか感謝するかってーの。は！」

そういつて唾を吐く。

彼には届かなかったものの、十分怒りを買ったみたいだ。

「いい加減にしろよ。現実を受け止める。君はもう正義になるしかないんだよ」

「俺はもともと根っからの正義マンだ」

「嘘をつくな嘘を」

そういわれた瞬間体が宙に浮いたような感覚に襲われた。

「くっ……」

「さあ。お別れの時間だ」

また1か月後にここで会おう。

視覚、味覚、嗅覚、触覚の4感覚が失われたとき彼のそんな声が聞こえた。

「だ……れ……が……会……う……か……！」

「会うことになるんだよ。結局はね」

「三ヶ木君！」

「うおっ！な、なんだ！？善吉！」

「あは！やっときずいた」

世界のみなさんおはようございます。三ヶ木 兎一計というものです。

よろしく。

目の前に（何故か）いるこいつは俺の幼馴染。
人吉善吉 ひとよしぜんきち 6歳

俺が通っている保育園の同級生である。

とりあえずはいろんな大前提としてみんなに聞いておいてほしいことがある。

俺は転生 s y (r y

え！？なんで！？なんで略られた！？まあそこは触れないでおこう。
メタ発言は好きではない。

「どうしたの？三ヶ木君」

「ん？いや。なんでもない」

「？。そう」

話を聞かれてたみたいだな。気を付けよう。

「ところで善吉よ」

「なに？」

「なぜお前がここにいる」

此処には俺の親はいないため、誰も招き入れるべき人物はいないはずだ。

それに俺特製の「超・ピース ロック」を取り付けたはずなため、簡単には入れない。

はず。

なのになんで普通ノーマルな善吉がこんなこと——っ！まさか！

「そう！そのまさかだ！」

「く！めだか！おまえ地の文む読むな！」

「そうこれぞ私のスキル！DOKUSINJYUTUだ！」

「カツコよく言っても無駄だから！」

くそ！またか！！また俺はこいつの侵入許してしまったのか…！

この偉そうな口調の幼女…けふんけふん。女の子は黒神^{くろかみ}めだか 6
歳。

もうこの面子で分かった人もいるだろう。

俺はめだかボックスの世界に転生させられたのだ。

まあとりあえず。とりあえず…だ。

「で、だ。なんのよう？めだか。善吉」

「いや。今からめだかちゃんのうちに行こうと思って」

「いや…すまないが、今日は…」

「なにもないのであろう」

「くっなぜ知っている」

まさかそれもスキルか！？

「ふふふ。あきらめて私の家にくぞ！」

「いやだああああ！お、俺は今日はだらけたんだああああ！」

こうして俺の今日の予定。だらけようZE は台無しになってしまった。

そこは（後書き）

いかかでしたでしょうか？

ご意見感想など、お待ちしております。

ではではでは何かいいことあったらごめんね？

お相手はちk - (r y

いわせねーよ!？

フェルマーの定理ゝ俺は言つとくが天才だぜゝb y ニケ木（前書き）

あえてここで言っておきましょう。

ニケ木は、上条みたいなやつです。

それではどうぞ！

フェルマーの定理、俺は言つとくが天才だぜ、b y 三ヶ木

「めだか宅」

結局あの後、めだかに気絶させられてしまったらしく、気が付いたらベツトで寝ていた。

「おお！起きたか」

「…ここは？」

「うむ！ここは私の家、黒神邸だっ！むふふ……。将来みーくんの住む家でもあるぞ？」

「はっ！冗談言つな」

「む。冗談ではないぞ？ならば『きす』をしようか」

「だれがするか。アホ。俺の唇は生涯を共にしてくれる人にしかしねえ。つうかてめえいつも園児相手にいつもキスしてんだろ」

「むう（それとこれとは話が違うのだが…）」

そういつてむくれるめだか。

やあこんにちわ。

上条さんだーけふんけふん。三ヶ木菟一計だよ。

分かつてる人はいると思うが覚えて言おう。

ここは黒神めだかの住む、黒神邸だ…！！

「ところで善吉は？」

ここでさっきから気になっていたことを言う。

「ん？あやつならトイレに…」

「…俺もトイレに行ってくる」

「廊下」

「…ここどこ？」

いやいやトイレに行くだけでこんな迷うとか。

ギャグですか？

「…図書室？」

そついやだいぶ本読んでねえなあ…。

入ってみるか。

ギイイイイイイ

ボタン

「おお！すげええ！この蔵書の数…パねえ！うわ…これとか30年前に絶版したやつじゃん！」

「うるせえ」

「…！…どなた？」

そこには、手足を鎖でつないだ少女。つまりはMっ気幼女がいた。

「…それを言いてえのは私だよ！（がりがりがりがりがりがり）」

「

「ああ！この豪邸の方ですか！…してお名前は？」

「何であなたに名前を教えなくちゃ——（がりがりがりがりがりがりがりがり）」

「お名前」

「だから何で——（がりがりがりがりがりがりがりがり）」

「お・な・ま・え」

「…黒神くじらだ。よく憶えとけ」

「俺は三ヶ木菟一計」

「（がりがりがりがりがりがりがり）」

「…あのさあ…何してんですか？」

「あのよお丁寧語やめてくれねえか？」

「オーケーオーケー。で、なにやってんだよ？」

「あ？見て分かんないの？（がりがりがりがりがりがりがり）」

「…勉強？」

「…まあそのとうりっっちゃあそのとうりだが…違う。（かたん）私は不幸になりたいんだ」

鉛筆を置きながらバカみたいなことを言う。

「知ってるか？歴史上の人物達はな、不遇の人生を送り、偉大な発見はたいてい劣等感から生まれている。だから、私も決して幸福であつてはであつてはならない。『素晴らしいものは地獄からしか生

(1) フェルマー数の問題

$n \geq 0$ の整数 n を用いて $F_n = 2^{2^n} + 1$ の形をした素数をフェルマー数という

フェルマー数は下の5個だけか？

$F_0 = 3$	$F_1 = 5$	$F_2 = 17$	$F_3 = 257$	$F_4 = 65537$
-----------	-----------	------------	-------------	---------------

(2) フェルマー数の問題

p を素数、 n を自然数とする。

$2^{p-1} \parallel n^{p-1} + 1$ を満たす (p, n) は何組あるか？

そのずっと下に乱雑な字でこう書かれていた。

4
と

「あいつ、いついたい・・・!？」

フェルマーの定理ゝ俺は言っとくが天才だぜゝb y 三ヶ木（後書き）

そついうわけでちょっと数学的な話でしたゝではではないいき
よー

噛んだからいいや。

とある変態のばかやろー俺が天才であることには変わらないb y 三ヶ木（前

とりあえず第四話れふ・・・どうじょ

短いです

p s 遅くなりましてすみません。

とある変態のばかやろー俺が天才であることには変わらないb y三ヶ木

「おい。善吉」

こんにちわ。三ヶ木兎一計です。

なんだか6日間ぶりな気がする俺です。

現在、善吉を捜し中です。

「ったく。これだと俺も迷う可能性があるかもな……」

いくら記憶力がいいからと言ってここまで広い……そして初見だと、どうしようもできない。

「おい。三ヶ木君！ここ！ここだよ！」

「ん？……おお！善吉見つかってよかったぜ」

そついつて手を引つ張つた瞬間だった。

「まちたまえ！その不審者！」

「……は？」

そこには、めだかに似ている男の子（娘じゃないぜ）がいた。

「誰だ……？」

「僕の名前は、黒神真黒。って敵に名前を教えてしまった……orz」

「……俺は三ヶ木兎一計だ。一応こいつと、めだかの友達——」

「遺言を残す時間を3秒やろう」

っ！？ナン……ダト……？いつの間に俺の後ろに……！

「っ！？」

腕を折り曲げ、ひじと前腕を使って、相手の腹を攻撃する。

いわゆる猿臂というやつだ。

「うぐ……！？」

そついつてうずくまる、鮪（あ、別に誤変換じゃないぜ？わざとだby作者）っは！今何かの電波を受信した！？

「ま……だ……だ……めだかを守るために僕はまだ終わるわけに——

へぶっ！？」

「……はい？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

っは！しまった！思わず突然のことに思考が停止してしまった！
こほん。とりあえず、今あったことを思い返そう。

？ 鮪がしゃべり終える前にめがかが、顔面とび蹴り

？ 俺が振り返る

？ ご乱心してらっしやるめだかさんが、鮪をグーで殴り続ける

？ 俺の思考が停止

まあこんな感じだ。

「じゃねえ！おい！めだか！それ以上やると死んじまう！」

「ふう！ふう！ふう！」
「ごすごすごすごす↑鮪を殴る音

「……………」
（すっげえいい笑顔）

あーこれはいけませんなー。この小説が15禁じゃなく18禁にな
ってしまふ。

ふう。ひさしぶりに説教たーいむ

「いいかげんにせいやあああ！！！」

ごす

と、二人の頭を鉄拳制裁する。

「はう！」

「お前ら兄弟で何やってんだ！特にめだか！お前実の兄を殴り殺そ
うとしてんじゃねえよ！俺がお前を殴り殺すぞ！」

「はうふう……………」

「次に鮪！」

「いやあの、字が違ー「知らん！」∴orz」

「お前は、まず妹をそういう目で見んのをやめなさい！お前は兄弟愛で言っただけかもしれないけれど、めだかはいいい迷惑なんだよ！」

「む。でもめだかはそんなこと口に出してないじゃないか」

「じゃあ、なんで死ぬまで殴ってんだよ」

「っ…」
そういうと、鮎は悔しそうに顔をゆがめた。
「ちっ」

俺は小さく舌打ちし、こういった。

「帰る。疲れた。寝たい」

「えっ…でも…」

「帰るつたら帰るんだよ！」

そういえば善吉ほっときっぱなしだったな。

「まあいいか？」

「じゃあな」

ガシャン！

そう言っただけで窓ガラスを割り、帰った。

「あーあ。勢いでやっちゃったけど、また明日顔合わせずらいな…」
窓ガラスの事や、後のことを考えて行動しなかった数十分前の自分に後悔する俺。

しかも道も分かんないじゃないか…。

「仕方がない。使ったびに吐き気がするほど気持ち悪くなるけれど、あれ使おう」

あれ、とは。

俺が、オールノンフィクション超理想主義と呼んでいるー（ry
はっ！また略られた！？

くそ！いつたいただが…！？（俺ですby作者）

？気のせいかな？変な宇宙意志が…

まあいいや。とりあえず、オールノンフィクションの説明をー
全略します。能力説明は、プロローグをどうぞ。by作者

―と、いう能力らしいんだ。

…？何でしゃべった気がしないんだろう…？

まあいいや。

とりあえず、使うことに―っ！？

「誰だ！？」

後ろから、異様な殺気を感じたため、俺は振り向いた。

そこにいたのは―

「安心院…なじみ…！？」

「あれ？僕のこと知ってたんだ。とりあえず…眠ってもらおうかな？」

「何を―っ！？」

脳が揺さぶられる。

「じゃあね。目が覚めたら会おう」

「…！？」

俺は意識を失った。

とある変態のばかやろー俺が天才であることには変わらないーb y 三ヶ木（後

いかがでしたしょーか？

ご意見ご感想などお待ちしています。

では何かいいことあったらいいね？

おあいては、きさりや

かんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2626y/>

よくあるよくある・・・ねえよ！

2011年11月17日19時41分発行